英国都市計画のデベロップメントプランに見る建築外部の色彩コントロール

COLOR CONTROL ON BUILDING EXTERIOR IN DEVELOPMENT PLAN OF URBAN PLANNING IN U.K.

熊澤貴之 —— * 1

キーワード：
色彩ガイドライン, 色彩計画, 英国都市計画, 色彩コントロール, 景観

Keywords:
Color guideline, Color scheme, Urban planning in U.K., Color control, Landscape

Takayuki KUMAZAWA —— * 1

The following two points to control colors on building exterior in urban planning of U.K. was demonstrated by analysis for documents and hearing from officer. 1) Colors were not controlled to be separated from other elements in landscape but to be combined with other elements in landscape under development control. 2) Colors on building exterior were controlled in consequence controlled building materials, an outdoor advertising and shop front.

1. 研究の背景及び目的

我が国の都市計画では土地利用規制が基軸をなし、土地に応じて建設できる建築物の用途と規模が制限され、様々な個別要素の基準が定められている。近年、これらに加えて景観法に基づく自治体の条例により、建築外部に使用できる色彩の色相、明度、彩度の範囲が数値で制限されることが増えてきた。しかしながら、良好な景観形成が実現されてきたとは言い難い。その理由の一つは、建築外部の表面に見られる色彩が建築材料によるテクスチャに関係なく、また、周辺環境との調和性に関係なく、色彩という単体のものとして制限されているからである。一般的に建築外部の色彩は建築材料に付随するものであるため、建築材料と別けて考えることは難しいであろう。さらに、我が国で運用されている景観計画では周辺環境と調和する色彩を使用するといったルールが示されているが、具体的な方法や手順が詳細に示されていないため、あまり実効性は高くない。

英国の都市計画制度は1947年に制定された都市農村計画法(Town and Country Planning Act)が原型となっており、1990年に現在の都市農村計画法が確立された。英国の都市計画では、開発許可制を中心とした土地利用規制が我が国の場合と比較にならないくらい厳格に運用されてきた。許可を要する「開発」に相当する行為の範囲が広く、土地におけるほとんどすべての「工事」を含むのみならず、その後に重大な用途変更も含まれ、特に土地と建物が一体として取り扱われることで、土地利用の規制を通じ、整然とした市街地の形成が行われてきたのである¹⁾。英国の開発は小規模な用途変更から大規模開発までを含み、建築デザインも許可の対象の一部になってい

る。都市の土地利用に関する望ましい将来像は開発計画(大ロンドンではUnitary Development Plan(以下UDPと表記))として示され、開発計画許可の運用にあたる地方計画行政団体は開発行為が開発計画に示された都市の望ましい将来像に適合するかを個別の審査によって判定している。開発計画に記載された内容に適合していない計画は許可されないため、この内容は非常に重要である。建築物の形態とデザインの審査にあたっては、高さ、大きさ、規模は数値化された基準に照らしてチェックされるだけでなく、都市デザインという大きな枠から全体の構成要素が評価される傾向にある²⁾。さらに個別の審査結果が不許可である時、案件の申請者は不許可の判断に納得することができなければ、不服申立てをすることが可能である。開発許可制度と不服申立て制度は表裏一体となっており、これが英国の厳しい制度を支えている。その上、近年、事前に具体的な将来像を示すことの重要性が指摘され、各自治体は望ましい将来像を具体的に示すガイドラインを発行してきた。それらはSupplementary Planning Guidance若しくはSupplementary Planning Document(以下SPGと記す)と呼ばれ、開発計画許可時に判断される個別要素の基準が明記されるようになった。一方、我が国の都市計画や景観計画では事前に個別要素の基準が具体的に定められ、申請案件がこの基準の範囲内であれば建設することが可能である。英国の都市計画では具体的な個別要素の基準に適合させた上で開発計画許可が求められ、我が国よりも非常に長い時間をかけて厳格な協議と審査が運用されている。

そこで、本研究は先進的な都市計画を運用する英国において、デベロップメントプラン等の計画書に記述されている内容を把握し、

¹⁾ 岡山県立大学デザイン学部 講師・工博
(〒719-1197 岡山県総社市窪木111)

²⁾ Lecturer, Faculty of Design, Okayama Prefectural Univ., Dr. Eng.

建築外部の色彩コントロールの実態を自治体の資料とヒアリングによって明らかにする。尚、本研究は歴史的な価値がある特性を保全・向上するために指定された保全地区 (Conservation Area) と、その地区以外の通常の地区を分けて記述する。

これまでの研究を見ると、英国の都市計画における建築外部色彩の考え方を記した先行研究はない。中井らは英国都市計画とマスタープランを論じる中で、建築物の形体とデザインの一つの項目として色彩を取り上げているが、具体的な色彩コントロールを扱っていない³⁾。

2. 色彩コントロールの実態

2-1. 建築外部の形状とデザインコントロール

ロンドンの自治体は建築外部の色彩をどのように制限しているかを把握するため、2010年3月に Communities and Local Government の担当者に問い合わせた。その結果、基本的に自治体が独自に策定したデベロップメントプランに従って制限しているため、自治体によって異なると回答があった。さらに保全地区や登録建造物については詳細なルールが運用されているが、一般的な地区においては自治体が建築外部の色彩に制限を加えることはあまりないこと、建物の色を塗り替えるための開発許可は不要であること、建築材料については開発許可の対象になっていることがあるという回答があった。

以上の回答を得た結果、一般的な地区では直接的に使用できる色彩の範囲を限定することはないが、建築材料の使用を限定することによって結果的に色彩コントロールになっていることが予測された。そもそも、色彩は建築材料や屋外広告物など、何かの視覚可能な個別な要素に付随しているものである。よって次節では UDP と SPG に見る建築外部の色彩コントロールの具体的な内容を調査し、上述の内容を検証する。

2-2. UDP と SPG にみる色彩コントロールの分析

本節では、現在における色彩コントロールの考え方を把握するために、ロンドン市とウエストミンスター市、さらに 31 の特別区で構成される大ロンドンにおけるすべて自治体の UDP と SPG を入手し、そこから一般地区における色彩に関するルールをすべて抽出した⁴⁾。入手した UDP と SPG は、2010年3月において実際に運用されているものである。ロンドン市内における UDP と SPG は、英国内の他の自治体と比較するとより詳細に記述されているため、本研究では、ロンドン市のものを研究の対象に選定した。

まず、UDP の内容を見ると、取り扱う内容が非常に幅広いために方針は記述されているが、具体的な内容は記述されていないことが分かった。例えば、ハウンズロウ区では「色彩、スケール、質感が周辺環境と調和した耐久性のある高品質な材料を使いましょう。」と

表1 ロンドンの UDP と SPG における色彩コントロールの個別要素

	要素	個別要素	Barking & Dagenham	Barnet	Bexley	Brent	Bromley	Camden	Croydon	Ealing	Enfield	Greenwich	Hackney	Hammersmith & Fulham	Haringey	Harrow	Havering	Hillingdon	Hounslow	Islington	Kensington & Chelsea	Kingston Upon Thames	Lambeth	Lewisham	Merton	Newham	Redbridge	Richmond upon Thames	Southwark	Sutton	Tower Hamlets	Waltham Forest	Wandsworth	City of Westminster	City of London		
UDPにおける色彩コントロール	都市デザイン	都市デザインを形成する重要な項目	○					○						○						○			○							○							
		建築デザインの質を高める項目				○																										○					
		地区の固有性を高める項目				○									○							○										○					
	商業空間	屋外広告物	○	○							○	○			○											○	○				○	○	○				
		サイン		○																													○				
		ショップフロント						○															○			○						○		○		○	
	建築材料	材料	○			○			○										○	○		○	○		○				○	○	○		○		○	○	
		素材のテクスチャ																			○		○	○		○			○	○	○		○				
	光環境	漏れ光																			○		○	○		○				○	○	○		○		○	○
		イルミネーション																			○		○	○		○										○	
	公共のデザイン	電気通信設備		○	○	○		○				○					○					○												○			
		安全な環境設計										○											○		○												
SPDにおける色彩コントロール	都市デザイン	都市デザインを形成する重要な項目										○			○	○	○					○	○			○	○				○	○	○		○		
		建築デザインの質を高める項目										○						○									○						○		○		
		地区の固有性を高める項目	○	○								○	○								○	○		○			○				○			○			
	商業空間	屋外広告物	○									○	○			○			○							○						○			○		
		サイン				○		○				○				○			○			○		○	○	○					○				○		
		ショップフロント				○		○				○		○	○				○		○	○		○	○	○					○				○	○	
	建築材料	材料		○				○	○		○	○			○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○
		素材のテクスチャ		○				○			○	○							○	○	○			○	○	○	○			○	○	○	○				
	光環境	漏れ光						○	○																											○	
		イルミネーション				○		○	○	○					○				○								○									○	
	公共のデザイン	電気通信設備																																			
		安全な環境設計	○			○		○	○	○												○			○	○						○	○				
パブリックレールム													○															○								○	
ストリートファニチャー		○																																		○	
色彩	色彩		○																																		

いった大きな方針が示されているだけで、具体的な基準は規定されていない⁵。UDP に記載された内容だけでは具体的なイメージを描くことは難しく、具体性・詳細性に欠けるため、各自治体は、SPG として具体的に望ましい像や望ましくない像を具体的に例示し、図面やパース、スケッチや画像で分かりやすく説明している。本節では、UDP と SPG における色彩に関するすべての記述を抽出し、内容を把握した上で構成要素を導き、関係を分析した。

表 1 に、ロンドンの UDP と SPG における色彩コントロールの個別要素を示す。筆者は内容を判別し、個別要素について記載されている場合には印を付けた。その結果、都市デザインという大きな枠組みの中で考えるルール、商業空間をデザインする際のルール、建築材料を選定するルール、イルミネーションや漏れ光など光環境をデザインする場合に色彩を重要視するルール、パブリックレلمを考えるルールが挙げられた。これらの 5 つの枠組みは UDP と SPG において同様に考えることができた。SPG は UDP に記載された内容をより具体的に提示するために作られたものであるため、具体的に示されている程度は異なるが、方針や方向性が同一であることは非常に理解しやすいことであった。

次に、個別要素については多くの自治体が記述している内容を抽出した。その結果、各自治体によって色彩コントロールのルールを構成する個別要素の内容が全く異なることがわかる。さらに詳細を見ると材料に関すること、屋外広告物に関することなどに多くの自治体がルール化していることが分かる。

さらに、ロンドンの自治体の内、パーネット区では材料と色彩の SPG が運用されていた。内容を表 2 に示す⁶。これを見ると、内容は色彩計画に関する基本的な原理が示されているだけであることが確認できる。

以上から、ロンドンの全ての自治体は一般的な地区において、建築外部の色彩について具体的な制限を設けていないことが明らかになった。大枠として捉えることができる要素や個別要素はそれぞれの自治体によって全く異なることが把握された。

2-3 グリニッチ区の SPG の内容

図 2 に、西グリニッチ保全地区において推奨されている色彩パレットを示す。グリニッチ区⁷の SPG は保全地区に適用されるものであり、保全地区や登録建造物に対してはオーセンティックな像を維持して行くために、色彩や材料の使用が厳しく制限されていた。この色彩パレットが適用される範囲は保全地区であり、非常に厳しく建築の制限が実施されている。この地区内は登録建造物も多く、補修する場合も厳密に指導された。登録建造物はかつて使用されていた色彩や材料によって塗り替えられた。色彩パレットでは二階以上の外壁の推奨色、アクセント色、ショップフロントの推奨色が提示されている。一階部分の店舗のファザードの色彩については図 1 に示されたショップフロントの推奨色から色を選び、二階以上は外壁の色彩を統一するように定められ、環境色彩の計画とマネジメントが厳しく実施されていることが把握できた。店舗名称などのサインや広告に関するきめ細かいデザインガイドラインは別に定められている。地域の特徴にあった基調色やアクセントカラー等が景観の色彩調査によって導かれ、さらにコントラストとなる色やより豊かになるような色が追加され、色彩のパレットの奨励色が構成されてい

表 2 パーネット区の材料と色彩に関する SPG

パーネット区のデザインガイダンス Note No:8 材料と色	
個別の建物の外観または街並みとして色を選ぶ時、注意深く熟慮しなければならない。新しい建物に使用される材料の種類だけではなく、材料の色彩は丁寧に決定されなくてはならない。これらは色彩調和論に基づいて行われるべきで、建物の状況に配慮して行われるべきである。保全地区内における既存の建物を変更する場合、以前に着色された壁や、窓枠、雨樋の色になるように規制されることもある。すでに色彩が主要な要素として考えられていることもある。	
目や脳が色から受け、反応する方法は複雑であり、色が作り出す感情的な反応は繊細である。一般的に赤とクリームの色からは暖かさを感じ、青やグレーの色からは涼しさを感じる。赤レンガハウスの緑の木細工など互いに補色関係にある色彩、白と黒など対称な色、赤レンガとグレーのスレートなど明るさと暗さをよく配慮して色彩を考える必要がある。	
色彩を選ぶ時、次の原則を大切にしてください。	
建物が集合住宅の一部であったり、連棟式集合住宅である場合は、色彩の仕様を共通にすることで統一感を保ってほしい。	
目に邪魔にならない補色関係にある色彩に配慮しましょう。	
色が建物や地区のデザインに欠くことができないところでは、適切な色として再着色されることが最も良いであろう。これは特に保全地区で適用されるやり方である。さらなるアドバイスは保全地区文書によって提供される。	
もし疑問があるなら、建物の写真と集合住宅の写真にクレヨンや色鉛筆で、様々な色彩の組み合わせを描いてみるとよいであろう。	
最後に、着色されていない材料、例えば、タイルやレンガなどはそのまま自然な状態で使われるのがよいでしょう。訳者：熊澤

図 1 グリニッチの SPG における色彩パレット

図 2 個別要素による色彩コントロールを実施する自治体の割合

る。この色彩パレットは素材と色彩を同時に考え、環境色彩計画の創造性を高めるように指標が提示されていることが特徴であった。筆者は 2011 年 9 月 6 日に現地を視察し、2011 年 9 月 6 日にグリニッチ区都市計画局を訪問し、色彩に関する SPG が保全地区を対象としている理由と通常の地区で色彩に関するルールが実施されていない理由をヒアリングした。(回答者：Ollie Miller 氏 (Spatial

Strategy Team Officer), London Borough of Greenwich)。その結果、グリニッチは世界遺産として選定された時から大きく開発が進み、環境色彩が壊れ始めたことから、グリニッチの歴史的背景などを調査の上、推奨色を提示し、この色彩パレットを用いたマネジメントが開始されたとのことであった。さらに、このような背景が色彩コントロールを可能にしたが、一般的な地区では難しいだろうと回答していた。

2-4 個別要素による色彩コントロールを実施する自治体の割合

色彩以外の個別要素による色彩コントロールを実施する自治体の割合を図2に示す。色彩以外の他の個別要素を制限することで、結果的に色彩が制限される実態が把握された。ここではUDPとSPGのどちらかに記載されていれば、色彩コントロールに関連した内容を実施している自治体と捉えている。その結果、最も多く見られた内容は材料の制限であり、8割の自治体を実施していた。具体的な記述例としては天然の風合いを重視し、素材の色彩を大事にするという内容であった。石材などの天然の外装材料をサイディングや樹脂製品などの人工の建材よりも推奨することで、建築外部の色彩は素材感を重視したものになっていることが把握された。

次に、4割の自治体が屋外広告物の色彩について制限していた。SPGの内容をみると、使用できる色と使用できない色が明確に指示されており、非常に詳細に記載されていることから、屋外広告物に対する色彩の制限は非常に厳格であることが確認された。英国における屋外広告物規制は1907年の広告物規制法を起源としており、これまで長い年月を経てアメニティと安全性の観点から屋外における広告看板を規制してきた。従って屋外広告物における色彩制限は市民に浸透しており、市民による支持が厳格な制限の実施を可能にしていることが推測される。さらに、4割の自治体がショップフロントと色彩を制限しており、屋外広告物規制と同様に非常に厳しく色彩コントロールを実施していた。このように一般的な地区においては、使用する色を直接制限するのではなく、天然の建築材料や望ましい屋外広告物を推奨することで、結果的に色彩が制限されることが把握された。

その上、色彩は都市デザインを形成する重要項目であるという内容について、4割の自治体が重要視していた。建築外部の色彩を他の都市デザイン要素と切り離して単独に考えるのではなく、他のものと一体と考えていくという考え方が重視されていた。また、3割の自治体が地区の固有性を確保する考え方を定めていた。

本節では、自治体によって重視する個別要素の内容が異なることが把握された。

2-5 本章のまとめ

このように、ロンドンの自治体が運用している開発計画とデザインガイドラインを調べたところ、一般的な地区では使用できる色彩を制限することは殆どないが、天然の建築材料を推奨することによって結果的に色彩制限になっていることを確認した。色彩に対する制限は、屋外広告物のデザインやそこで使用される色彩に対しては非常に厳しく制限している状況とは全く異なっていた。保全地区でなければ建物の色を塗り替えるために開発許可は不要である。しかし一般的な地区において、天然の建築材料を推奨した結果、使用

できる色彩が制限されることが多々あり、建築材料の選定に関しては開発許可の対象になっていることが多い。保全地区でなければ一般的には建築外部の色彩はあまり厳しく制限されていないことが把握された。

3. まとめ

本研究は先進的な都市計画を運用する英国において、デベロップメントプラン等の計画書に記述されている内容を把握し、建築外部の色彩コントロールの実態を自治体の資料とヒアリングによって明らかにした。その結果、一般的な地区における建築外部の色彩コントロールの考え方として、1) 開発許可制度において周辺環境に調和する度合いを一体的に制限することはあるが、色彩という個別の規制によって制限することはないこと、2) 天然の建築材料や望ましい屋外広告物やショップフロントを推奨することで結果的に色彩が制限されることが把握された。

我が国の色彩コントロールは、建設ラッシュが続いていた時代、異質な建築外部色彩を持つ建築を制御し、乱れた色彩景観に秩序を呼び起こすことを狙いに定めた場合には機能したかもしれないが、現在の成熟化した社会においては都市環境及び自然環境の保全と再生による都市共生を前提に考えた計画システムに変換しなければならない。英国とは我が国と民主主義の歴史や都市計画の成熟度だけでなく、建築外部に使われる建築材料も大きく異なるため、英国における色彩コントロールをそのまま導入することは不可能であるが、地域の固有性を丁寧に収集し、エリアのコンテクストを引き出し、今後も維持継続させていくための細やかな色彩コントロールの方法を考えていく必要がある。特に天然の建築材料や人工の建築材料に対しては色彩規制を区分けした上で、建築外部に使われる建築材料の色彩計画を考えることが必要である。さらに屋外広告物、ショップフロントの色彩とテクスチャなどを丁寧にコントロールしなければならない。最後に、景観色彩は人によって大きく評価が異なるため、様々な人々が意見討論会に参加できる情報交流と専門的な景観色彩に関する知見や指標を踏まえたうえで審議できる協議システムも制度化されるべきである。

謝辞

本研究のヒアリング調査に快くご協力賜わり、貴重な資料を頂いた自治体関係者の方々に深くお礼を申し上げます。本研究は2009～2010年度文部科学省科学研究費補助金(若手研究(B)課題番号21760482)によって行われた。ここに記し、感謝したい。

注

1. 文献1) P304-P305 参照
2. 文献2) P153-P157 参照
3. 文献2) P153-P157 参照
4. ロンドンの自治体はWebsiteでUDPとSPG/SPDを公開している。筆者はこれらをすべて入手した。Websiteに掲載されていないUDPとSPG/SPDについては直接、自治体より取り寄せて資料を収集した。
5. 文献3) 参照
6. 文献4) の内容の一部を筆者が翻訳したものである。
7. 文献5) 参照

参考文献

- 1) 原田純孝他：現在の都市法，東京大学出版会，1993
- 2) 中井検裕，村木美貴：英国都市計画とマスタープラン，学芸出版社，1998
- 3) London Borough of Hounslow: Unitary Development Plan Adopted, P85, December 2003
- 4) London Borough of Barnet: Materials and Color, Design Guidance note No. 8
- 5) Greenwich Council: Greenwich Town Centre Color Guidance Note, 2002

[2012年2月20日原稿受理 2012年4月3日採用決定]